送葬詩小論

——王褒の詩を中心として——

後藤秋正

一

梁より北朝に遷った王褒[1]（五一四?～五七七?）に、「送観寧侯葬」「送劉中書葬」と題する詩がある。また、庾信（五一三～五八一）にも、「送炅法師葬」詩[2]が残されている。これら「送〇〇葬」と題する詩は、ともに南朝から北朝に仕えた王褒と庾信にのみ見られるものではない。このほかに、原作は残されていないものの、陳の張正見にも、「和送陽侯袁金紫葬詩」[3]がある。これらの作品を一群のものと見なす考え方は、類書における分類を見ると、盛唐期にはすでに存在し、宋代には確立していたと考えられる。

『芸文類聚』巻三十四、人部哀傷の詩の項には、曹丕「寡婦詩」、王粲「七哀詩」などと並んで前述の王褒の二首が収録されているのみで、特に「送葬」の項は設けられていない。ところが『初学記』巻十四、礼部下には、死喪、挽歌とは別に「葬」の項が設けられて、何遜「悲行路孤墳詩」、陰鏗「行経古墓詩」のほか、前述した庾信、張正見の詩および唐太宗「望送魏徵葬詩」が収録されている。ただし、ここには王褒の二首は収録されない。また、『文苑英華』巻三百五においては、詩の悲悼の項にはさらに細分類が設けられ、哭人、哭僧道、哭妓の項目と並んで独立して「送葬」の項目が立てられ、庾信「送霊法師葬」、王褒「送観寧侯葬」など十二首が収録されている。『芸文類聚』『初学記』と『文苑英華』では収録作品数に隔たりがあって直接的な比較はできないが、『文苑英華』の分類がいっそう細密化していることは一目瞭然である。『初学記』では一括して哀傷に分類されていた何遜、陰鏗などの墳墓を詠ずる詩は、「墳墓」の項に別に分類されている。この分類を見る限り、宋初には「送葬」と一括される作品群の存在が意識されていたことは確実であろう。

会葬者が送葬に参加することは、『左伝』昭公三年（前五三九）の条、昭公三十年の条などにすでに記録があり、『漢書』蘇武伝でも、李陵が、匈奴領内の北海のほとりに移された蘇武に向かって、蘇武の留守中に亡くなった蘇武の母親の葬儀の時に、送葬して景帝の陽陵に至ったことを告げている。また、『漢書』孔光伝には、多数の者が葬儀に参列した記録があり、これらも含めて、送葬の例は他にもしばしば見られる。[4] これらのことから考えると、送葬の起源はかなり遡れると思われる。以後も葬儀に関しては、基本的には漢代の制度が踏襲されていったとされるので、[5] 送葬の風習も魏晋南北朝期を通じて行なわれたものであろう。[6] しかし、特定の人物の送葬そのものを対象として詩が作られることはなかった。そういった意味で、王褒の「送観寧侯葬」詩は、制作年次の確定できる、特定の人物の送葬を対象としたごく初期の作品となっている。

小論においては送葬詩の推移と展開を考える手始めとして、王褒のこの詩、および「送劉中書葬」詩を取り上げて分析を加え、その特質について考察してみたい。

二

「送観寧侯葬」詩は、三十六句からなる長篇である。[7]

1 蒙羽高峻極　蒙羽　高峻極まり
2 淮泗導清源　淮泗　清源より導く
3 邢茅廣地裂　邢茅　広く地を裂き
4 跗蕚盛開蕃　跗蕚　盛んに蕃を開く
5 紛綸彤腰彩　紛綸たり彤腰の彩
6 從容瓊玉溫　從容たり瓊玉の温
7 衝飈搖柏幹　衝飈　柏幹を揺るがし
8 烈火壯曾崑　烈火　曾崑に壮んなり
9 疇昔同羇旅　疇昔　羇旅を同にし
10 辛苦涉涼暄　辛苦して涼暄を渉る
11 觀風方聽樂　風を観ては方めて楽を聴き
12 垂淚遽傷魂　涙を垂れては遽かに魂を傷ましむ
13 造舟虛客禮　造舟　客礼を虛にし
14 高閈掩賓垣　高閈　賓垣を掩ざす
15 桂樹思公子　桂樹に公子を思ひ
16 芳草惜王孫　芳草に王孫を惜しむ
17 今晨向郊郭　今晨　郊郭に向かふ
18 猶似背轘轅　猶ほ轘轅を背にするが似し
19 丹旐書空位　丹旐　空位を書し
20 素帳設虛樽　素帳　虛樽を設く
21 楚琴南操絶　楚琴　南操絶ゑ

22韓書舊説存　韓書　旧説存す
23西靡傷新樹　西靡に新樹を傷み
24東陵惜故園　東陵に故園を惜しむ
25自憐悲谷影　自ら憐む悲谷の影
26彌愴玉關門　弥いよ愴む玉関の門
27餘輝盡天末　余輝　天末に尽き
28夕霧擁山根　夕霧　山根を擁(つつ)む
29平原看獨樹　平原に独樹を看
30皋亭望列村　皋亭に列村を望む
31寂寥還蓋靜　寂寥として還蓋静かに
32荒茫歸路昏　荒茫として帰路昏し
33挽鐸已流喝　挽鐸　已に流喝し
34童歌行自喧　童歌　行くゆく自ら喧(かまびす)し
35睠言千載後　睠言す千載の後
36誰將遊九原　誰か将て九原に遊ばん

観寧侯とは蕭永のことである。彼の単独の伝は史書には見えず、梁時期の事績が『梁書』蕭綸伝、『陳書』周敷伝、『南史』蕭範伝に散見する。これらによれば彼は、梁の太祖蕭順之の第九子である蕭恢の子であって、武帝蕭衍（高祖）は伯父にあたる。[8] また、王褒は蕭恢の娘を娶っているから、蕭永とは義兄弟になる。蕭永は、侯景が太清三年（五四九）三月に建康を陥落させたころには、兄の鄱陽王蕭範に命じられ、尋陽から、贛江流域の食糧輸送路を確保するために莊鉄を救援すべく予章に赴く。しかし、叛服常なかった莊鉄のために捕えられてしまう。その後、脱出した彼は周敷のもとに身を寄せて手厚い保護を受け、江陵に送られる。江陵に着いたのは、侯景の乱の中にあって、ここで勢力を温存していた湘東王蕭繹が侯景の勢力を長江下流域から駆逐して、束の間の平安が訪れた太清六年の初めころではなかったか。この年の十一月に元帝蕭繹が即位する。ところが、承聖三年（五五四）十一月、西魏の大軍がにわかに江陵を包囲する。吏部尚書左僕射であった王褒は、都督城西城南諸軍事に任じられて江陵城の防衛に当たった。しかし、蕭繹は降伏し、土囊で圧殺されてしまう。この間の蕭永の動静は詳らかではない。江陵陥落後、王褒らは西魏の都、長安に連行される。本伝には、「褒與王克、劉毅、宗懍、殷不害等數十人、俱至長安、太祖喜曰、昔平吳之利、二陸而已、今定楚之功、群賢畢至、可謂過之矣。」とある。「太祖」とは西魏の実質的な支配者であった宇文泰のことである。西魏に連行された者のうちに蕭永の名は見えないが、この詩の第九・十句は、王褒と蕭永が同時に長安に連行されたことを示す。また、「涼喧」の語は、十二月に江

陵を出て、初春に着いたことと符合する。さらに、蕭永の死については庾信にも彼の死を悼む「思旧銘」があって、序文の冒頭には、「歳在攝提、星居監徳、梁故觀寧侯蕭永卒、嗚呼悲哉。」と述べられる。このことから蕭永が卒したのは、北周の明帝の二年（五五八）、陳の武帝の永定二年であったことが分かる。王褒が文学好きの帝の左右にあったころに、蕭永は長安で卒したはずである。ところが詩は長安ではなく、長安のはるか東方の蒙山と羽山、淮水と泗水の描写から始まる。第一句から第六句までは、『尚書』禹貢の徐州の記載を巧みに踏襲しているのである。「蒙羽」と「淮泗」は、ともに禹貢に見られるし、「邢」と「茅」も、周公の血筋を引く者が支配する、広義には徐州に属した国である。「跗蕚」は、花のうてな、転じて兄弟の親密さを言うが、徐州が草木の叢生する土地であるとされるのに対応し、第五・六句の「彤腰彩」と「瓊玉温」も、蕭氏一族の人物の高貴さと多彩さを言うが、禹貢の徐州に関する、赤い土などを産したという記載と対応している。王褒がこのように徐州の記述から始めたのには、実は理由がある。それは、蕭永の家系と関わる。『梁書』武帝紀は蕭氏の家系について、「高祖武皇帝諱衍、……南蘭陵中都里人、漢相國何之後也。」と言う。「南蘭陵」の郡治は南徐州にあった。また、蕭衍の遠祖とされる蕭何は、『史記』蕭相国世家によれば「沛豊」の人であり、秦の沛県豊邑、前漢の沛郡豊県は、まさしく古の徐州の中心である。つまり王褒は蕭永の死を悼むに際して、その遠祖にまつわる地から説き起こしたのである。このように死者の家系から説き起こすことは、墓誌銘等にしばしば見られる。例えば、北魏の延昌二年（五一三）に書かれた「魏故衛尉少卿謚鎮遠将軍梁州刺史元（演）君墓誌銘」[9]の銘文は、「分波洪淵、承湍海泐、構基天宗、紹皇七世、厥考伊王、厥祖維帝」と始まるし、北魏の孝昌元年（五二五）に書かれた「魏故青州刺史元（暐）敬公墓誌銘」の銘文の冒頭には、「遙原遠系、迺皇迺帝、長瀾不已、層峰無際」とある。王褒は、これら墓誌銘を意識しながらも、北地において、南朝出身者である蕭永の家系を明示することはせず、風景描写に借りながら、それが蕭何に連なることを言いたかったのであろう。第七・八句は、つむじ風が柏樹を揺るがし、崑崙山が烈火に包まれるように、蕭氏一族を中心として繁栄していた梁王朝の命運が暗転したことを言う。第九～十二句は、元帝政権の崩壊後、ともに風土の異なる長安に至ったことを述べる。第十三・十四句は、多くの高官が葬儀に会したことを言う。第十三句の「造舟」は、舟を並べて造った浮き橋。『後漢書』

章帝紀、建初七年十一月の記事に、「東至高陵、造舟於涇而還。」とある。蕭永の葬儀には、相当な準備がなされたのであろう。「虚客礼」の語については、顔延之「陶徵士誄」（『文選』巻五七）に、「世覇虚禮、州壤推風」とある。第十五・十六句は、『楚辞』九歌、湘夫人の「沅有芷兮澧有蘭、思公子兮未敢言」や、同じく招隠士の「王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋」などを踏まえつつ、蕭永の魂が返ることを願う。[10] ただし、『史記』淮陰侯列伝中の漂母の言葉、「吾哀王孫而進食。」に付せられた「索隠」が「劉徳曰」として、「秦末多失國、言王孫、公子、尊之也。」と指摘するのを考えあわせるならば、蕭永が亡国の失意のうちに亡くなったことをも含んでいよう。第十七・十八句は、葬列について言う。送葬が早朝に開始されたことは、魏晋の挽歌などからもうかがわれる。第十八句は、曹植「洛神賦」（『文選』巻一九）の「背伊闕、越轘轅」を踏まえる。また、庾信「陝州弘農郡五張寺経蔵碑」にも、「西臨砥柱、東背轘轅」と、同様の表現が見られる。「轘轅」は、実在の地名としては洛陽東南の関所や山を指すが、[11] 長安郊外の険しい山の比喩として用いたものであろう。第十九句から第三十句までは、墓所への到着と、そこからの眺望と感慨を述べる。「丹旐」は、深紅の文字で死者の官位や姓名を記したのぼり。ときおり墓誌銘に見られる語であって、北魏の正光五年（五二四）に書かれた「魏故驪驤将軍洛州刺史涇陽県開国子李（遵）使君墓誌」に、「丹旐夙設、龍轜戒辰」とあるし、同じく北魏の太昌元年（五三二）に書かれた「魏故司空府参軍事元（頲）君墓誌銘」にも、「丹旐翩翩、龍轜岌岌」とある。第二十一・二十二句の意味は詳細にはとらえにくい。ただし、「楚琴」は、『左伝』成公九年の条に見える、楚の鍾儀の故事に基づく。彼は鄭の捕虜になって晋に送られたときに、晋侯に琴を与えられると、故郷である楚の音楽を奏でたという。また、王褒らが長安に到着したときの太祖の言葉に、「定楚之功」とあったことからすると、「楚琴」は、梁の宮廷の調べを奏でる琴を指すであろうから、第二十一句全体は、蕭永の死によって、南朝の秘曲が絶えたことを言うのであろう。「楚琴」の語は、庾信「和張侍中述懐」詩にも、「操樂楚琴悲、忘憂魯酒薄」とある。また、「思旧銘」も、嵇康の故事など、琴に関する典拠を多用するから、蕭永が琴を善くしたことは間違いない。第二十二句の「韓書」[12] は、韓非の著述であろうか。とすれば、韓非は故国の韓から余儀なく秦に入って殺された人物であるから、これも庾信「擬詠懐詩二十七首」〈其五〉に、「吳起嘗辭魏、韓非遂入秦」と言うように、蕭永が北地で亡くなっ

たあとに、多くの著述が残されたことを言うのであろう。第二十三・二十四句は、『荘子』駢拇篇の「伯夷死名於首陽之下、盗跖死利於東陵之上。」を想起させる。これに基づいた表現は范曄「臨終詩」（『宋書』巻六九、范曄伝）に、「豈論東陵上、寧辨首山側」などと見える。しかし、「西靡（首山）」にしても伯夷と叔斉が餓死した場所であるし、「東陵」も大盗賊の盗跖が死んだ場所である以上、これを踏まえるとは考えにくい。西の岸辺では新たな墓樹が植えられたのを悲しみ、東の丘では蕭永が帰郷できなかったことを無念に思う、と解するべきであろう。第二十五句の「悲谷」は、『淮南子』天文訓に見える、余りにも深く険しいために人を悲しませる峡谷。庾信「思旧銘」にも、「降乎悲谷之景、實有憂生之情」とある。第二十六句の「玉関門」は、敦煌西方の玉門だが、庾信「傷心賦」に、「對玉關西而羇旅、坐長河而暮年」とあるように、庾信ら故国喪失者にとっては北地の象徴でもあった。第三十一句からは霊車が戻ることを言う。第三十三句の「流喝」は、司馬相如「子虚賦」（『文選』巻七）に、「榜人歌、聲流喝」とある。最終句の「九原」は、『礼記』檀弓下に、「趙文子與叔譽觀乎九原、文子曰、死者如可作也、吾誰與歸。」と見えるように、もともと春秋の晋の地であり、卿大夫の墓地があった。沈約「冬節後至丞相第詣世子、車中作」詩（『文選』巻三〇）にも、「誰當九原上、鬱鬱望佳城」とあり、王褒は蕭嶷を悼んだこの詩から発想を学んだように思える。また、この語は北魏の太昌元年（五三二）に書かれた「魏故使持節侍中太保大司馬録尚書事司州牧城陽王（元徽）墓志銘」にも、「叶茲三兆、方從九原」とある。ちなみに、蕭嶷は南斉の高帝蕭道成の第二子であるから、その墓所は父が葬られた泰安陵（江蘇省丹陽）の近傍にあるであろうし、元徽が洛陽の穀山に葬られたことは確実であるから、王褒が蕭永の墓所を九原と表現しても不自然ではない。なによりも王褒自身の「周太保尉遲綱墓碑」に、「三千不見、九原誰作」と言うように、このころまでには卿大夫の墓地を、晋の地とは無関係に、九原と称していたのである。

さて、王褒のこの詩は、蕭永の出自から始まり、哀悼の情を織りこみつつ霊車の出発から帰還までを述べ、最後に再び悲哀の情を述べて結びとしている。[13] 典拠にも工夫がうかがわれ、緊密な構成を持つ重厚な作品になっていると言えるだろう。

三

次に、王褒のもう一首の送葬詩、「送劉中書葬」詩を見

てみよう。

劉中書は、梁の武帝蕭衍の第八子で、一時期、蜀で皇帝を僭称した蕭紀から中書侍郎を授けられた劉璠（五一〇～五六八）のことであろう。劉璠は王褒らが北地に入るより一足早く、梁の大宝三年（五五二）五月、西魏軍が南鄭を陥落させる直前に降伏して長安に赴いた。太祖宇文泰と会見したときに、太祖の側近で僕射の申徽に、「昔晉主滅吳、利在二陸。明公今平梁漢、得一劉璠也。」と言わしめている。その後、黄門侍郎、儀同三司、内史中大夫に累進し、平陽県子に封じられたが、清廉潔白に過ぎたために周囲と合わず、左遷されて北周の天和三年に卒した。内史中大夫の官も、梁における中書侍郎の官に相当する。劉璠はもと仕えていた蕭曄の死後、独り蕭曄の喪を奉じて建康に至ったとき、東宮に在った蕭綱に「優賞」されているから、このころ太子舎人であった王褒と識ったものであろう。

1 昔別傷南浦　昔別れしとき南浦に傷み
2 今歸去北邙　今帰りて北邙に去く
3 書生空託夢　書生は空しく夢を託し
4 久客每思鄉　久客は毎に郷を思ふ
5 塞近邊雲黑　塞近くして辺雲黑く
6 塵昏野日黄　塵昏くして野日黄ばむ
7 陵谷俄遷變　陵谷も俄に遷変し
8 松栢易荒涼　松柏も荒涼たり易し
9 題銘無復迹　銘を題するも迹を復す無し
10 何處驗龜長　何れの処にか亀の長きを験さん

先の詩とは異なり、故人の生前の状況を具体的に述べる句はない。しかし、それだけで王褒と劉璠の関係が希薄だったとは言えない。詩中に多くを述べることによって、逆に否応なく悲哀を追体験せざるを得なくなってしまうことを避けたとも考えられるからである。

第一句の「南浦」は、『楚辞』九歌、河伯に、「送美人兮南浦」とあり、江淹「別賦」（『文選』巻一六）にも、「送君南浦、傷如之何」とあるように、送別の場を象徴する。それは、王褒自身の「別陸子雲」[14]詩の起聯の「解纜出南浦、征棹且淩晨」においても同様である。第二句の「北邙」は、普通は洛陽北郊の邙山であり、後漢以来の王侯貴族の墓所を指す。ただし、ここでは単に墓所を言うのであろう[15]。第三句の「書生」は学問する人の意だが、王褒の「寄梁処士周弘讓書」（『周書』本伝）に、「所冀書生之魂、來依舊壤、射聲之鬼、無恨他鄉。」とあることからすると、北遷して「久客」となる以前の、梁朝にあったときの劉璠に王褒自身を重ねていると考えてよかろう。第五・六句には特定の

典拠は求められないようだが、杜甫「秦州雑詩二十首」〈其十八〉の「塞雲多斷續、邊日少光輝」という表現は、王褒に学んだかと思われる。第七句は、『詩経』小雅、十月之交の、「高岸爲谷、深谷爲陵」を典拠とした、いわゆる陵谷の変を言う。これは庾信「竹杖賦」に、「世變市朝、年移陵谷」と見えるほか、墓誌銘にしばしば見られる表現である。いくつかの例を挙げてみよう。

懼金石有朽、陵谷不居。　「蕭融墓誌銘」梁・天監元年（五〇二）

年序云邁、陵谷徂遷。　「梁桂陽国太妃（王纂韶）墓誌銘」梁・天監十三年（五一四）

陵谷或改、芳音詎滅。　「魏故輔国将軍徐州刺史昌国県開国侯王（紹）君墓誌」北魏・延昌四年（五一五）

陵谷可毀、竹素易亡。　「君諱弼（元弼）墓誌」北魏・普泰元年（五三一）

ほかにも多数の例があるが、ここに挙げた限りでも、梁以後、北朝においても用いられたことが見て取れよう。もちろん墓誌銘におけるこれらの表現は、陵谷の変があろうとも死者の栄誉が不朽に伝わることを祈願して石に刻んだことを言うのである。これに対して王褒は続く句で、陵谷も遷移し、松柏も凋残するように、墓誌銘すらも不朽ではなく、亀の長寿も証拠はないと言う。ここでは墓誌銘などに用いられる常套的な表現を用いながらも、逆に墓誌銘の不朽性すらも否定することによって、劉璠の死を自身に納得させようとする王褒の姿勢がうかがわれる。

さて、この詩は五言詩ではあるが、墓誌銘もしくは墓碑の銘文（韻文）部分に挿入しても違和感がないと思われる。[16] 北魏の正光五年（五二四）の「魏故隴驤将軍平陽檀（賓）府君墓誌銘」の銘文の中間部分を見てみよう。

朱輪方昇　朱輪方（はじ）めて昇り
鳴笳將擧　鳴笳　将に挙がらんとす
驚風峻動　驚風　峻動し
太山其頽　太山も其れ頽れんとす
松扇夜啓　松扇　夜啓き
泉門晝開　泉門　昼開く
曉風空往　暁風　空しく往き
夕月虛來　夕月　虚しく来る

また、先に一部を引いた「魏故隴驤将軍洛州刺史涇陽県開国子李使君墓誌」の銘文は次のように言う。

悲纏朝野　悲しみは朝野に纏ひ
痛結朋親　痛みは朋親に結ぶ
丹旐夙設　丹旐　夙に設け

龍轜戒辰　竜轜　辰を戒む
悽悽楚挽　悽悽たる楚挽
灼灼容輔　灼灼たる容輔
長歸泉室　長へに泉室に帰し
委體幽塵　体を幽塵に委ぬ
令譽無朽　誉れをして無朽ならしむれば
清松日新　清松　日びに新たならん

これらはいずれも送葬と埋葬を言うものである。これらの銘文には王褒の詩に見られるような、死者に対する個人的な感慨は窺われない。しかし、王褒の送葬詩が墓誌銘をかなり意識して制作されたことは、今まで述べてきたところからも明らかであろう。先にも触れた王褒「周太保尉遲綱墓碑」の銘文の末尾は次のように言う。

逝水詎停　逝水　詎ぞ停まらん
光陰不借　光陰　借(かりめ)ならず
遽辭逆旅　遽かに逆旅を辞し
俄悲恆化　俄かに恒(とこしへ)に化するを悲しむ
旌舒夏練　旌は夏練を舒べ
棺陳衞幕　棺は衞幕を陳ぬ
北郭人稀　北郭　人稀に
西山景落　西山　景落つ
三千不見　三千　見えず
九原誰作　九原　誰か作(おこ)らん

「三千」は、庾信「至老子廟応詔」詩に、「路有三千別、途經七聖迷」とあり、倪璠は、『礼記』王制の「凡四海之内、斷長補短、方三千里。」を典拠として示す。ここでは埋葬が終わって送葬の人々が帰り、西山に日が沈んだあとの広漠とした墓域にあって、死者は決して甦らないことを言うのであろう。李富孫『漢魏六朝墓銘纂例』巻四は、王褒「周太傅燕文公于謹墓碑」について、「文多駢偶、不書諱字、略述世胄及所歴官爵、卒年不書、銘詞四言例有詳略也。」と言い、また、同じく「周太保尉遲綱墓碑」(17)についても、「體例與于謹碑略同、而不著其世胄官爵、祇云任隆台袞而已。」と言う。これは王褒の墓碑が、通例とは様相を異にして、諱字、家系や生平の官職などを具体的には述べないことを指摘したものである。確かに、彼の墓碑には死者の平生の事績を詳述しようとする姿勢は見られない。このことは李富孫が、庾信「周太子太保陸孤逞神道碑」に対して、「首書諱字姓郡、次敍世胄及所歴官爵、後詳贈謚、幷敍夫人亦以合葬也、竝及嫡子又加詳也。」と指摘しているのとは明らかな対照を見せている。

さて、中野将「庾信『思旧の銘』について」(18)は、次のよ

うに指摘している。

何故それではこの作品は「梁故観寧侯蕭永銘」であり得なかったのか。おそらくそれは、蕭永が梁朝の人だからであろう。庾信の集には、おびただしい数の墓誌銘が残されているが、それらは全て北周の高官及び夫人の為の作品である。蕭永は梁朝の人であるが故に墓誌銘には出来なかったのだろう。王褒を始め、友人の死には傷む詩しか残せなかった庾信である。プライベイトな「銘」とするのが精一杯であっただろう。

同様のことは王褒についても言えるのではないだろうか。王褒には紀功碑と寺碑の類以外に四篇の墓碑が残る。これらは、前述の于謹、尉遲綱のほか、陸逞、馮章と、いずれも北魏から北周に仕えた人物に対して書かれたものであった。庾信が私的な銘を蕭永の死に際して捧げたのと同様に、王褒は、蕭永については墓誌と墓碑とを意識して、劉璠については特にそれぞれの銘文を意識して送葬詩を制作したのである。その際に、王褒自身が墓碑に試みた手法を応用したことは、すでに述べてきたことから明らかであろう。二篇の送葬詩は、北遷した者に対して公的な墓碑文を捧げられなかった王褒の、苦渋に満ちた創意と工夫の結晶だったのである。

注

(1) 王褒の卒年を、北周の建徳年間（五七二～五七七）とすることは諸説一致しているが、沼口勝「王褒の生卒年について」（「漢文学会々報」二二、一九六三）は、建徳四年か、これを一、二年下る範囲と推定し、清水凱夫「王褒の伝記と文学」（「立命館文学」一〇～一二、一九七五）は、建徳六年とする。また興膳宏『庾信』（集英社、一九八三）は、建徳五年ごろと推定し、「王褒（五一三?～五七六）」と記す。さらに、曹道衡「関于王褒的生卒年問題」（『中古文学史論文集』中華書局、一九八六）は、建徳三年としている。

(2) 『初学記』巻一一は「炅法師」に、『文苑英華』巻三〇五は「靈法師」に作る。

(3) 『初学記』巻一一は「陽侯」に、『文苑英華』巻三〇五は「楊侯」に作る。

(4) 例えば、『漢書』薛宣伝、劇孟伝、『後漢書』鄭玄伝など。

(5) 例えば、梁満倉『中国魏晋南北朝習俗史』（人民出版社、一九九四）は、「……以上我們叙述了魏晋南北朝時期的喪葬礼儀。拿這箇時期的礼儀同古礼比較、我們説這箇時期基本上依古礼而行。」と指摘している。

(6) 唐代に至っても送葬が行なわれていたことは、数首の送葬詩が残っていることから明白であるが、これらについての考察は別稿に譲りたい。そのほか、例えば張籍（七六五?～八三〇?）の「北邙行」には、「洛陽北門北邙道、喪車轔轔入秋草、車前齊唱薤露歌、高墳新起日峨峨、朝朝暮暮人送葬、洛陽城中

人更多」と、送葬の様子が詠じられている。

(7) 主に逯欽立『先晋漢魏晋南北朝詩』によったが、『芸文類聚』巻三四、『文苑英華』巻三〇五、『漢魏六朝百三家集』王司空集などによって改めた箇所がある。

(8) 『梁書』巻二三太祖五王伝に、「鄱陽忠烈王恢、字弘達、太祖第九子也。」とある。太祖は、梁の武帝蕭衍の父、蕭順之を指す。蕭恢の嗣子の範が永の兄である。中野将「庾信『思旧の銘』について」(「中国文化」一九八五)は、蕭永の父が、簡文帝蕭綱の第一〇子鄱陽王恢である、と言うが、蕭恢は蕭順之の子であって、簡文帝の子ではない。蕭恢は簡文帝の叔父にあたる。

(9) 以下、墓誌の引用は、趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』(天津古籍出版社、一九九二)による。

(10) 第一六句について、前野直彬「春草考」(『春草考』秋山書店、一九九四所収)は、「永久に帰らぬ旅に出で立った人を思うときにも、春草は同じようにして使われる。……こうして六朝の詩人たちは、楚辞招隠士の言葉を典故として踏まえながら、春の若草の上に、去って帰らぬ人のおもかげを描くようになった。」と指摘している。

(11) 保定四年(五六四)一一月に、北周の尉遲迥の軍が洛陽を包囲したことはあるが、武帝が大軍を発して北斉領内に進攻したのは、建徳五年(五七六)一〇月であり、都の鄴を陥落させたのは翌年正月である。大象元年(五七九)正月には、宣帝宇文贇が荒廃した洛陽に行幸している。そのときの詔には、「河洛之地、世稱朝市、……自魏氏失馭、城闕爲墟、君子有戀舊之風、小人深懷土之思。」とある。北周が洛陽を修復して東京と称したのは、これ以降のことである。

(12) 『漢魏六朝百三家集』王司空集は、「韓書」を、「韓詩」に作る。

(13) なお、呉先寧『北朝文学研究』(台湾文津出版社、一九九三)第三章は、この詩に触れて、以下のように指摘している。「蕭永既爲梁氏宗室、則深受梁朝廷賞識的王褒對他自然有很深的感情、又在江陵之難中一起成爲羈旅、則王褒對之更添了一層『同爲天涯淪落人』的命運認同。所以蕭永之卒、對於王褒是『兎死狐悲』的感覺。……蕭永之死、不禁使王褒想到了自己的結局、於是在悲悼蕭永的同時產生了一種茫然無所歸宿的心情。」

(14) 『芸文類聚』巻二九は、「別陸才子」に作る。

(15) 注(11)参照。

(16) 六朝美文と四言韻文の関連については、福井佳夫「六朝美文の詩化に関する一考察——詩と文のあいだ——」(「中京大学文学部紀要」第二九巻二号、一九九四)に、極めて示唆に富む指摘がある。

(17) 牛貴琥「王褒論略」(「山西大学学報」哲社版、総第六一期、一九九三)は、この碑銘と「太子太保中都公陸逞碑銘」の一部を引用して、「這和北朝大量的呆板碑文是不同的。」と評価している。

(18) 前掲、注(8)参照。なお、「思旧銘」が銘と称しながら、実質は誄であるという指摘が、鍾優民『望郷詩人庾信』(吉林

大学出版社、一九八八）に見えている。

（北海道教育大学）